

投動作学習プログラムの開発とその学習効果

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2017-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大矢, 隆二 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00024377 |

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻：共同教科開発学専攻

氏名：大矢 隆二

論文題目：投動作学習プログラムの開発とその学習効果

論文要旨：本研究の目的は、S市の小学校体育指導の背景を探るとともに、独自に開発した投動作学習プログラム前後の投距離および学習後の投動作の変容、児童の意識変容を検証することで投動作学習の効果を明らかにし、それらを踏まえた上で今後の体育学習の可能性を考察することであった。

第1章では、S市小学校86校にアンケート調査を求め、体育指導および投能力に対する教師の指導実態を明らかにすることを目的とした。結果から、教師活動の重要度では、「投能力の現状を調べること」と「投能力の変遷（伸び）を調べること」などで、やや強い相関が得られた。自由記述では、「児童の運動に対する経験値の差を踏まえ、投・捕の基礎的能力を身につけさせることが肝要」との回答が多くみられた。

第2章では、小学校第5学年を対象とした投動作学習プログラムを実施し、学習前後の投距離等の変容を検討した。その結果、投距離における2要因分散分析（性差×時期）では、時期の主効果（ $F(1, 24) = 73.51, p < 0.001$ ）が0.1%水準で有意であり、性別の主効果（ $F(1, 24) = 6.28, p = 0.019$ ）が5%水準で有意であった。学習後の投射角度と初速度の性差の検討の結果、投射角度の平均値は、有意な差はみられなかった（ $t = 0.318, df = 24, p = 0.754$ ）が、初速度の平均値は、男子の方が有意に高かった（ $t = 2.77, df = 24, p = 0.011$ ）。

第3章では、改訂版学習プログラムの実践をもとに、学習前後の投距離および初速度等の動作変容を明らかにすることを目的とした。投距離における2要因分散分析（性差×時期）の結果、時期の主効果（ $F(1, 31) = 55.10, p < 0.001$ ）が0.1%水準で有意であり、性別の主効果（ $F(1, 31) = 3.89, p = 0.057$ ）は有意でなかった。また、実験群の経過観測では、学習プログラムを実施した成果があらわれ、投距離平均値が大幅に向上、保持されていたものと考えられる。とりわけ「投」に関する動きの頻度が高まったのではないかと推察できる。

第4章では、投動作の量的変化だけでは表れない心理的側面に着目して、投動作学習を通じた児童の心理的変容プロセスをインタビューにより明らかにすることを目的とした。分析の結果、【動機づけ】、【投動作の省察化】、【自己効力感】、【他の運動への汎化】という4個のカテゴリーとそれに含まれる4個のサブカテゴリー、14個の概念が生成された。投動作学習を通して、教材・教具の活用による【動機づけ】が【投動作の省察化】を促進し、【投動作の省察化】が【自己効力感】の高揚をもたらし、さらに、【自己効力感】の高揚は、

【他の運動への汎化】および【動機づけ】に影響を及ぼすと考えられた。

第5章では、短期間における投動作学習の効果と学習過程のつまずきについて検討した。短期間学習の2要因分散分析（性差×時期）の結果、時期の主効果（ $F(1,33) = 6.45, p = 0.016$ ）は5%水準で有意であった。性別の主効果（ $F(1,33) = 8.41, p = 0.007$ ）は1%水準で有意であった。性別と時期の交互作用は有意でなかった。また、インタビュー内容をM-GTAにより分析した結果、4個のカテゴリーおよびそれに含まれる6個サブカテゴリー、15個の概念が生成された。学習過程のつまずきに関する概念では、〈学習内容の理解不足〉、〈技能習得の困難〉、〈自発的行動の不足〉、〈応用に関する発想力の不足〉の4つのつまずきに関する概念が生成された。

本研究は、S市における体育指導および投能力に対する教師の実態を明らかにするとともに、学習プログラムを通じて、児童の投距離、投動作といった技能面の変化、児童の思い、気付きといった心理的変容プロセスを検討し、その学習効果を検証してきた。

その研究過程では、まず、S市の教師の実態を初期条件として、全体の傾向を把握した。これらの背景をもとに、独自に開発した投動作学習プログラム（初期版、改訂版）を構築してきた。またその効果を検証するために、児童の投距離および投動作のデータを量的側面から検証するとともに、さらには、児童の心理的変容から投動作学習の効果を質的側面から検証することによって、量的には検証し切れなかった児童の心理的側面を解明してきた。これらの検証からは、S市の児童に対して投動作学習プログラムが投距離の伸びと投動作学習の技能的効果を明らかにするだけでなく、心理的にも投動作学習がもたらす運動有能感が生涯スポーツへ継続する可能性を示し得たと考える。このことは、本研究がS市の小学校における体育学習においても、投動作学習に対する認識の変化という契機を与えることになると考えられる。さらに述べるならば、本研究が体育科（小学校）から保健体育科（中・高校）へ連続するカリキュラム開発の基礎研究であることから、ひいては教科開発学的一端を担う研究であると言えよう。

本研究では、以下の点が課題として考えられる。第一に、学習プログラムの運動内容の拡張である。投能力の向上には、どのような動作を身に付けることが有効かは明らかになったが、その学習内容は固定化されたものであった。第二に、心理的変容の各カテゴリーは、類似のヴァリエーションから生成されたものであり、個人を特定したものではない。今後、個人的背景の詳細な分析を加えることで、新たな知見が得られるものと考えられる。第三に、投運動を得意と児童7名と不得意とする児童7名の計14名のインタビュー調査をもとに、4つのつまずきに関する概念が生成された。今後は、プラスの循環から一時的に、あるいは中長期的に外れてしまった児童に対し、能動的に学習に向かわせるための具体的な手だてを構築していくことが課題である。以上の課題に着手しつつ、教師のニーズに応えるためにも、より質を高めた短時間かつ効果的な投動作学習の開発と普及が望まれる。このことは、「ボール運動系」および「球技系」の学習を発展させるとともに、体育科（保健体育科）の教科開発をさらに進めることにつながると考えられる。